

研究所  
だより

# モニター会議概要

現地モニター（敬称略・五十音順）

・美唄市 井澤 勇太  
(畑作・野菜経営)

・副理事長・所長 坂下 明彦

・美瑛町 内田 達也  
(JAひえい)

・専務理事 道下 徹  
・常務理事 石田 健一

・天塩町 宇野 剛司  
(酪農経営)

・新篠津村 大塚 早苗  
(野菜・畑作経営)

・音更町 津島 朗  
(畑作経営)

・名寄市 中野 康則  
(稲作・野菜経営)

一般社団法人 北海道地域農業研究所

坂下 それではモニター会議を開催いたします。「ご出席いただいた皆様にはお忙しいなか、ありがとうございます。今回は冒頭でモニターの方から、少しまとめた経営のお話をいただきたいことにしました。それでは宇野さんから、どのような段階を踏んで現在の経営に至っているかをお話いただければと思います。

当研究所では、現地の実態を的確に把握し業務推進に活かすため、新進気鋭の農業者に現地モニターを委嘱し、さまざまなご意見をうかがう場を設けています。

本年度は、一月二一日に、札幌市内で会議を開催し、意見交換を行いました。

以下その概要を紹介いたします。



坂下所長（挨拶）  
右から石田常務、道下専務、今野部長



宇野剛司氏：天塩町

**宇野** 僕は、今の形態を想定してなくて、初めは、家族経営でした。僕が大学を卒業して、当初は父が一人で牧場を經營していたので、本当に小さな農家で、放牧を実践している方のところに視察に行つてみたり、他の農業関係の研究所の方たちに来ていただきて、うちで実際に放牧したらどうなるか、いろいろとデータ

を出していただき、父を説得して、ようやく一年くらいかけて放牧に踏み切ることができました。

やはり一年目は非常に悲惨な結果でした。もともと舖飼いだったので、それを放牧するということだけで、本当に労働時間もすごく大変でした。牛も、怪我で淘汰したこともありました。非常に結果が悪い一年目でしたが、二年三年と経つていくにつれて、牛、人も慣れて、徐々に経営が良くなっていたといつ緯です。

その中で僕も毎年、放牧酪農の勉強をしようということで、年に一回ぐらい放牧クラブの勉強会に参加したり、外食産業の方たちの話を聞いていくうちに、実際に生産するだけではなくて、お客様との直接のやり取りというのは、面白そうだなっていうように感じてきて、それで「じゃあ僕もそれやろうかな」と思いました。

実際に乳製品化をスタートしたのは、二〇一二年ですが、三～四年近く「さあ、

夕を出していたとき、父を説得して、ようやく一年くらいかけて放牧に踏み切ることができました。

やはり一年目は非常に悲惨な結果でした。もともと舺飼いだったので、それを放牧するということだけで、本当に労働時間もすごく大変でした。牛も、怪我で淘汰したこともありました。非常に結果が悪い一年目でしたが、二年三年と経つていくにつれて、牛、人も慣れて、徐々に経営が良くなっていたといつ緯です。

その商品を販売している中で、いろいろなイベントに参加して、いろいろなバイヤーさんたちと商談して、商品を作つて販売を広め、徐々にいろいろな方たちとつながりを持つことができて、販路は広がってきました。

その中で、僕が二八歳くらいの頃、父が肺ガンになってしまい、いろいろな治療、いろいろな抗ガン剤や、認可になつていらないような様々な治験薬も試しました。でも、すごく副作用が強くて、「この治療していくと反対に命を削るな」というような印象をもちました。それで、「何がガンを少しでも抑制して、寿命を

延ばせるか?」と思つた時に「やはり食だろ?」と云つて、「行きつきました。

そんな中、放牧した牛の牛乳の中には、抗がん成分が多く含まれるというような

研究データが当時あったので、「より放

牧を突き詰めていけば、そういう健康

作用の強い牛乳を生産できるのではないか」ということで、放牧をさらに突き詰めるようになりました。当時、穀物を与えていたので、「本当に100%牧草だけ

で生産した牛乳は、もつといいのではないか」というように考え、草だけで牛を生産して牛乳を搾ろうと考えました。父も、ガンを発見した時は「余命二ヶ月」と言われたのですが、最終的には三年近く生きることができました。だから、やはり食が一番重要だなど。どんな薬よりも、良い食べ物がなければ人は生きられないなど、僕はそう思っています。

海外では、オーガニックが当たり前にスーパーに並んでいる。そんな中で、バイヤーから「オーガニックでやれば、もつ

と海外では売りやすく価値をつけやすいよ」と言われ、「それでは有機の価値をつけて放牧に取り組んでいい」つ」ということで、有機の認証を取得しました。

ずっと家族で働いてきましたが、加工

も忙しくなり、牧場も少しずつ大きくなつ

ていたので、人手が足りなくなってきた時期があつて、その時は本当に一番大変な時でした。つなぎ牛舎で、50頭の牛

を一人で搾乳して、150ヘクタールぐらいの草地を一人で機械を使って収穫するような年が何年も続き、もう流石にちょっと大変だということで、人探しが始まりました。当時、うちの牛舎がすごく古かつたので、建替えも検討していました。建替えの計画の中では「一人で、100頭ぐらいは搾れる体制を作ろう」と。その

当時、さすがに牧草収穫作業はどうにもならなかつた。本当に大型化しかなかつたのですけれども、「さすがに搾乳は自動化できるような体制をとっていきた

いな」と考えていました。

当時、ニュージーランドで放牧酪農をしている方が、搾乳牛四〇〇頭を一人で管理しているという話を聞いて、「それはすごいな。これはいいな」と思つて実際に見に行きました。そうしたら、やはりその方は、うちと同じように集約放牧で、細かく放牧地を区切つて放牧していたのです。そこはやっぱりロボット搾乳だったのです。一人で四〇〇頭も搾るのは不可能だったので、ロボット搾乳機が確かに六台くらいあって、一四時間放牧しているというスタイルだったのです。他の国を見ても、そのような事例がなく、初めて見た事例でした。経営者の仕事といえば、牛を畠に追いに行くというような作業があるくらいで、あとは放牧地の切り替えです。そこでは、八時間おきくらいに朝晩、毎回放牧地が切り替わります。その放牧地を切り替える仕事があるくらいで、その他はずっと事務所でパソコンに向かっているような作業スタイルだったのです。それであれば、今後、

離農が進んで草地がどんどん余っている日本では、非常に有効な手段になつていいだろうなと思い、是非このシステムを持つていいかと思う、いろいろと検討して、実際に取り組みました。しかし、日本でのロボット搾乳を扱つメーカーは、やつたことのない事例には対応したがりないわけです。世界中探してもその当時は、まだニュージーランドぐらいしかやってなくて、尚かつロボットを製作しているメーカーがやつているのではなかつた。個人の酪農家が、システムエンジニアの経験もあつたため、全部自分がシステムを組んで作つていたのです。それで、当然ながら、ロボット搾乳機を扱つ会社は、どじも「そんな事例を知らないからできません」ということで断わられまして、途中でその計画がストップしている状態です。これがもし、そういう情報が、どんどん増えていつたら、日本でも将来できる可能性があるのでないかと思つています。一人で四〇〇頭を扱うという

ことは、本当に革命的だとこいつです。僕自身は見てきたので、実現できぬとは思いますが。そついた計画もありつつ、なんとか少しずつ人がうちの会社にも増えてきて、ロボットがなくともパーラーの牛舎を建てて運営していくくらい人は充足してきました。今現在、社員が四名いて、あと僕と妻と一人の形でやつております。

まだ僕自身ではせいせい一五〇頭ぐりの牛で、草地が一三〇ヘクタールという形なので、それほどすこく大きいという訳ではありません。しかし、地域では一〇年、一〇年後には、酪農家が半分以下になると予想されていますので、少しでも早く、そういうシステムを作つていただければと思つています。

地域の酪農が崩壊するといふのも目に見えているという状態ですが、スマート農業に関して言えば、やはり機械です。牛はロボット搾乳があれば、なんとか搾乳ができるという体制にはなつています。

やはり収穫作業です。今は一三〇ヘクタールをやるだけでも、夏場は死にそうなど、毎日機械に乗つているという状況になつています。

一三〇ヘクタールでは、トラック三台で作業するわけです。ですから、今の労働力では、もう限界といつ状態なのです。ようやく数年前から自動運転技術とかを耳にしますが、それがもっと広まるのが早いのか、それとも離農者から出でてくる使えない畑が増えるのが先なのか、どうちが早いかの状況です。

本当にいち早くシステムを開発してもらいたいと思います。うちもさすがにこれ以上畑を広げるのは厳しいなというのが実際のところです。まだ大型化は可能なのですが、もつ機械が異常な値段になつてるので、流石にそれを投資して回収できるという見込が非常に難しいわけです。そのため、次に投資するとなれば、自動操作もできるような設備体制かななど感じています。以上です。

坂下

乳製品としては、資料にある写

眞のとおりですね。

宇野

はい、今現在はこのほかに、ヨーグルトがあります。来年からはチーズとバターを販売開始予定です。

坂下 工場の方も従業員が従事しているのですか？

宇野 そうですね。うちでは搾乳がメインなので、従業員は、日中は結構工場で加工作業などを行っています。

坂下 宇野さんに何か質問がありますか？

大塚 お話をありがとうございました。

三五〇頭の牛の牛乳は全量、自分で加工するのですか？農協に出したりしないのですか？

宇野 そうです。でも農協・ホクレンに出荷する場合には、グラスフェッドは

まだ自社加工は二割から四割ぐらいなので、残りは全部ホクレンに出荷しています。

大塚 もう全量グラスフェッドでやっているのですか？

関係ないのですけれど。

大塚 そうであれば、今の酪農の資材価格高騰問題には影響を受けていませんね。

宇野

はい。しかし、うちでも個体販売はかなり大きなダメージを受けています。メスはちょっとなり売れるのですが、オスが全く売れない時期が結構長く、「どうせ売れないのだったら、うちで育てて肉にしてみようか」ということを考えまして、試験的に肉牛も今一〇～三〇頭飼養しています。

昔からちょっと興味があったので、古くから残している牛も何頭かいります。一番歳を取っているやつで、メスで未経産の九歳という牛がいます。肉質は、メスのほうが柔らかくて美味しいといいますので、「こいつが草だけです」と年取ったうづうづなるのださう」と思っています。スペインとかアメリカとかで「一番美



大塚早苗氏：新篠津村

味しい肉ってなんですか?」と聞いた時に、「ビンテージビーフ」というわけです。つまり、年取った牛を食つと言つのです。スペインでは一四歳の牛とかを食べていて、それがすこく美味しいという話を聞いて、それでうちでも頑張つて年を取りさせていこうとして、今試験をしている段階です。

**大塚** ロボット搾乳を見学したことがありますが、穀物飼料が美味しいから、それを食べたくてロボットのところに並んでくるのだという話を聞きました。それで穀物をやってない場合は、どうやって並ばせるのでしょうか?

**宇野** はい。それが最大の疑問点でした。それで「ユージーランドではどうやっているのかを見た時に、放牧では牛が外で青草をお腹いっぱい食べます。でも搾乳して牛舎から出すと牛は一日散に畑に帰つていきます。毎回、搾乳後には

必ず新しい草地に出すようにしているのです。いつもすると、毎回必ず新しい草が生えているところに行けると覚えるので、そうすると穀物じゃなくて、そつちの草を目的として急いで搾乳して、急いで帰つていくわけです。畑の草で釣るということであります。

**坂下** ありがとうございます。肉の話も出ましたが、今は日本の円安が大変なことになつていて、飼料をずっと輸入に頼ってきた日本として、今後どういう形に持つていくのかが課題となつています。そういう意味では、宇野さんがやつてられたことは正解なのですが、今まで相当独自の道を歩んできた感じだったと思うのですが、これから先の見方、見通しというのは大分変わつてきましたか?

**宇野** そうですね。僕も々々に、放牧をやつている方がメインとして集まつて、いる勉強会に顔を出しました。そこには

は、数多くの学生が来ていました。新規就農者を目指す人たち七〇～八〇名くらいの半分以上は学生（帝畜大や北大や酪農大など）なわけです。その学生たちは、「大きな牧場ではなく、家族経営のみで完結できる放牧をしながらの経営がやりたい」ということで集まつてきました。

実際に放牧酪農のメンバーたちも、経営収支的には落ち込んだものの赤字ではないわけです。だから肥料代など全ての経費が上がつて、厳しいのは確かに、もう経営ができませんということではないのです。時代は悪いけれども、それでも利益を出しているという現状なので、どんな時代でもやはり家族経営の小さな牧場は残る確率が非常に高いです。半面、放牧スタイルでやる方たちは数少ないので、これから増えてくれれば、本当に家族経営が見直されるのかもしれません。しかしながら、国の政策、方向性が規模拡大路線なので、なかなか合わな

いわけです。クラスター事業もできない

わけじゃないのですが、やはり一〇〇頭

以上の牛舎を建てないと意味がないわけ  
で、機械もどんどん大型化して投資もす  
ごいから、小さな「三〇～四〇頭で搾乳  
したい」というところには全く必要のな  
い機械になってしまいます。全てが大型  
化へシフトしており、小さな農家が効率  
よく使えるようなものが少なく、非常に  
やりにくいと思います。

だいたい家族経営で放牧をやりますと  
いう形は、居抜きで継承して、その機械  
を使って壊れたら中古の機械を買ってと  
いう方たちがほとんどです。今の時代で  
生き残っていくには非常に良いやり方、  
方法ではありますが、政策とは合わない  
のです。

でも、「こうした農家だけでは、離農し  
た農地をきちんと使いきれないから、や  
はり大きな農家も必要であり、大型化が  
進んでいくことになる。非常に難しい時  
代ではありますが、僕はより効率化を考

えていいと思っています。

**坂下** やはり畜産クラスターはまだま

だという感じですかね。

**宇野** 現状でもやはり畜産クラスター

で牛舎を建てるという人もいます。間違  
いなく元の牛舎よりも大きな牛舎を建て  
ているので、次は畑を広げて大きな機械  
を買うのか、餌をたくさん買うのか、と  
いうことになります。そうなると、今  
乳価で搾って経営しますと言つても、多  
分機械や建物は非常に厳しいのは確かで  
す。

**坂下** どなたかご質問ありますか？

**津島** よろしいですか？全道的には、  
適地適作に向け、温度・気候・地形など  
いろいろなものに合わせてやることが最  
終的なことになるのではないかと思いま  
す。温暖化が進み「やっぱり牛は暑いの

は苦手」となれば、必然的に涼しいとい  
うで畜産をやつたほうが良いということ  
です。

地元でも、複合経営で畜産をやつてい  
る人たちの中でも、平地でいろんな作物

を作れる人々は、畜産をやめて畑作專  
業になっている人々もいます。  
どちらかといふと傾斜地などで畜産が  
行われてきていると感じています。おそ



津島 朗 氏:音更町

いく傾斜地は土地代が安く、安くないと畜産は難しいのではないかでしょうか。安い土地と気候が涼しいところに畜産が根付いています。今、宇野さんがおしゃったように、畜産には放牧型で入つてもうのが正しい進み方じゃないかなと思います。本当に失礼なのですが、土地は安いですよね。

が、一〇アール当たり二〇万円程度の土地を買ってやつてこぬですよ。だから、高額な土地でも成り立つことは、ニュージーランドが証明しています。でもそれは放牧の規模が違います。八〇〇頭とかの規模感なので。

そういう規模感でのやり方であれば、酪農でも十分そういう土地を使ってできるわけです。

宇野 天塩は非常に安いですね。せいぜい一〇アール当たり三万円で買えます。

津島 そうでしょうね。つうとは十分の一以上違います。

坂下 やはり、単位は一〇アールではなくヘクタールなのでしょうね。

津島 海外に行つたらエーカーの話になるのでしあうね。

宇野 先ほどの一ユージーランドです

坂下 十勝でも、中心部等で酪農と畑作でやつていた時期もありましたが、すこし乳量じやないと成り立たないのですよ。宇野さんのといひは、一田に一〇キロ程度でしあうか？

宇野 はい、夏場で大体それくらいです。冬だつたら一〇キロ以下ですね。

津島 小麦や豆も作つて、あと野菜もちよつと作つて、また畜産をやる人がいます。それはどうかと思つっていたのですが、放牧は応援しようかなと思つています。放牧は冬の間はどうなるのですか？

宇野 はい、冬はですね。雪の上でロー

ダメだつてといひでないけど、畜産は守れないのではないか思います。食料争奪戦を考えた時に、すぐ立ていいといひで畜産の餌なんかを作つたら怒られる時代がくるのではないかと思います。

ルサイレージを給与し、雪の上で過ぐせていたいふつた感じになります。

**津島** その辺のところをうまくやれば、本当の畜産地帯を作れるのではないと、思います。

現況では畑作地帯も、てん菜は多少控えるような話があるものの、あとはすべての作物を増やしてくれと頼まれている状況です。畑を休むことなく使っている状態の中で、もっと増やしていくのは矛盾があって、なおかつ耕畜連携事業の対応で、割り込んでデントコーンを作ってくれと言われています。

その事業に合わせてトントコーンを作つたりする人がいる。やつすると何らかの作物を減らすことになる。その人たちは、事業がある間は作るけど、なくなつたらやめると思っている人もいるので、安定的な生産ではないと感じています。

あと、加工部門の收支というのはどういう状況でしょうか？

**宇野** 去年の実績で言つと、全体で一億三千万円ぐらいの売上げで、そのうち八割が加工になります。

約一〇年経つていていますが、加工の売上げは安定して伸びています。今は乳価が上がつていて、乳代の売り上げも上がりますが、やはり上がり方では乳代以外のほうが大きいですね。

取引範囲がだんだん広がり、いろいろな取引になつていています。大きなとこならばかりではなく、結構小さな取引先も多くして、一軒が倒れたら無くなつてしまつということがあります。

だから、成功事例をみると、「農家が一軒減つて、加工業者が一軒誕生」ということがなど。それは加工部分が、いかに付加価値を持つて利益を得ているかという証明に他ならない。だから宇野さんのような畜産の方たち、優秀な方たちは、どんどんそちらの方にスライドしていくのではないかと思っています。

**津島** 能力があるということですね。生産だけでなく、加工販売まで。

**宇野** コロナになってからは、オーガニックに反応する方がすごく増えてきたという気がします。時代的に健康志向の

ブームで増えているのは確かです。

**宇野** 天塩はたくさん土地があつて、まだ僕は増やしていくなければいけない

**津島** 放牧は良いと思っていたのですが、リノール酸が多くてガンの抑制効果も高いみたいな話は初めて聞きました。ハピネスディイリーなど成功者の十勝の事例では加工部門は一〇年間はみんな赤字で、それからようやく販売が軌道に乗り、一〇年後から黒字になったといつ話は聞いています。成功した後、二〇年後、三十年後はどうかというと、ほぼみんな加工に力を入れていて、本業の方はさっぱり増えていない状況です。

だから、成功事例をみると、「農家が一軒減つて、加工業者が一軒誕生」ということがなど。それは加工部分が、いかに付加価値を持つて利益を得ているかという証明に他ならない。だから宇野さんのような畜産の方たち、優秀な方たちは、どんどんそちらの方にスライドしていくのではないかと思っています。

状況です。

でも、いろいろな物産展を歩き回ってみると、実際そういう方はいるわけです。元々、牧場をやっていたけれど、豚肉加工とか、レストラン経営をして、もう牧場はやっていないという方がいます。でも、牧場なくしてこの形は出せないと僕は思っています。やはり「牧場ありきの乳製品」だと考えています。

**大塚** 営業先を見つけるのは大変だと思つのですが、実際に発注が来て、送り状を作つて発送するような実務的なことはどうやっているのですか？

**宇野** 工場関係・乳製品関係は全部妻が取り仕切つていて、あとは社員が製造担当です。他の日常的じゃない事務的なことは僕がやっている感じです。

**中野** 物産展関係は誰が？



中野康則氏：名寄市

**宇野** 物産展は基本的に僕がつきます。一週間ぐらいですけれど。行けない場合は別の方に行つてもいいことがあります。

ことになりました。今、加工をしていると資材価格の高騰があり、その影響を受けたのですが、これから見通しはどうですか？

**宇野** 確かに加工をしていると、材料が全て値上がりしているため、製品もどんどん値上げをしています。うちも、将来そうなるだろうという想定のもとで価格を設定してきたので、まだなんとかギリギリ吸収ができる現状です。でも、もうこれ以上となると、うつむきさすがに値上げせざるを得なくなります。それに見合った価値をどのようにつけていくかという事に力を注ぐしかないかなと思います。

**坂下** 地域農研の研究員も出席していますが、何かありませんか？

**星野** 新規就農者で施設園芸をやつている方に話を伺う機会がありました。先

ほど皆さんがあつしゃったように、資材など外部からの影響を受けるという話がありました。一方、彼らは夫婦で働くことで、あまり外から影響を受けないところに魅力を感じて就農しているとも言っています。法人化して加工部門が増えて、家族でやるというのとは違う苦労があるかと思いますが、いかがですか？

### 宇野

人を雇うことは、僕も徐々に経験させてもらっていますが、やはり難しいと感じています。経営もですが、人を扱って、ずっと牧場で働いてもらうためにはどうしたらいいかななどということを日々頑考えています。今までうちに来る方たちは意外と若い方で、一〇～二〇代が多いのですが、今まで辞めた方に「何が大変だった？」と聞くと、「全然仕事は問題ないし、給料も問題ないです。でも、ここずっと暮らすというのは、なかなか想像ができない」と言わされました。車に乗つて遠くまで行かないと遊べるよう

な場所もないのに、本当にその生活が好きで新規就農したという方は別ですが、なかなか難しい。働くという選択肢として一応理解して来てはいるものの、本当に周りに何もなく、尚かつ冬はものすごい猛吹雪で家から出られない、そういう環境が厳しいかなというような意見が一番多いです。

### だから、そういうことを、どう解決していくかを考えています。その一つと

して今、自宅にサウナを作りました。従業員には、「サウナに自由に入つていいよ」ということを言っております。今後は、パートナーができるカラオケルームなどを作りたいです。どうせ自分たちが入るのだったら、もうちょっとよく作つて、商売、観光として使えたらいこうともあります。牧場の生活という環境を楽しくし、しかもお客様にもこの牧場の生活がいかに優雅な生活かということを見せていくという考え方で牧場作りに取り組んでいます。

### 宇野

できればそうですね。搾乳は一年一年単位でも全然構わないのですが、機械作業となると経験が必要です。機械はよく壊すのですが、一回壊れたら何十万円ですから、その費用は大変です。そこだけはやはり経験のある人がいなければ、僕がずっとついていなければいけないわけです。

今後もまだまだ畠が広がって、尚かつ機械も大きく、高額になつていくとなると、やはり慣れた人ではなれば本当に任せられないわけです。

僕の地域でも、オペレーターは重要で

### 棚橋

今の続きの話ですが、若い人が

来てずっと暮らすのが難しいというのであれば、それを前提にするのではなく、

五年なり三年なりを北海道の牧場で働いてもいいという方法もあるようにも思いま

す。やはり同じ人に長く働いてもらいつ

方が当然経験知も増えてくるので、やは

りそちらの方がいいでしょうか？

す。他の大きな牧場の人を雇つて機械作業をやつても「うと、時給四千円程度は払わなければ来てくれない。」そういうやんとした運転ができる人は本当に少ないです。

**坂下** それでは宇野さんのお話は「これくらいにして、中野さんからお話しをお願いします。温暖化や今年の問題も含めて、新しく取り組んだ部分とともに、お話をいただければと思います。

**中野** 僕の経営は水稻なのですが、もち米主体です。名寄は、もち米を生産団地で作っています。

今年は七月の下旬くらいまでは、気温・雨量とも順調に推移していたのですが、八月の上旬辺りから大雨があり、私はミニトマトをハウス六棟で作っているのですが、八月上旬、昼夜を問わず結構な勢いで雨が降り続き、排水が追い付かず、約半分が浸水して根腐れになりました。

その時は、すぐに酸素供給材を入れたのですが、それも間に合わず、やられてしましました。その後、八月の下旬にもお盆過ぎの猛暑があり、その影響か、水稻の倒伏被害が多くなりました。総体的に気温もよかつたので、「お米がてきて倒れている」という話をしていました。しかし、根元の様子を見ると、根元がポキッと折れているという感じ、熱に耐えられなくて倒れてしまう形でした。また、今年は稻刈りも結構大変で、コンバインの刃を下まで抑えつけ、すくい上げるような形で稻刈りをしました。去年は、もち米で一俵以上獲れましたが、今年はそれでも一俵落ちぐらいで済み、収穫量としてはそんなに悪くはありませんでした。

また、僕個人でゲストハウスを建てていて、修学旅行生を受け入れています。コロナが落ち着いたので、観光協会やグリーンツーリズムも動き出し、再開しました。一〇月下旬には大阪の高校生男子四名を受け入れ、一一月にも静岡県の高校生を受け入れています。その他に観光協会関係で、ハウスで作っているトマトやピーマンなどでピザ窯を使ったピザ作り体験もやっています。

名寄には、餅をつく「もち大使」といいう人たちがいて、NHKの生中継の際に、倉庫を貸して餅つきをやるなど、名寄のPRなどにも積極的に参加しています。先ほども言ったのですが、ミニトマト

た。

ジユースを一六年ぐらい作っていました

が、資材価格の高騰を受けて、その経費を転嫁すると、とんでもない販売価格になりました。それでもう一人の新規就農者と相談して、ミニトマトジユースを止め、違うものを模索していくと考えています。

**坂下** ありがとうございます。皆さんから質問はありますか？

**津島** ミートジユースがとんでもない価格になると言われていましたが、とんでもない高い価格では売れないのでしょうか？

**中野** いま、五〇〇ミリリットルを一、一七〇円程度で売っていますが、一五一〇円ぐらいにしないと採算がとれません。また、市の施設も老朽化が進んでおり、施設までも自分たちで揃えることを考へると、値段がどんどん上がっています。

きます。

ただ、やめると言った途端、売上げが上がるという現象が起きて、今は在庫が無くなっています。

世の中は、格好だと、信用できる人が作っているものだから買うことがあります。これからも加工のチャンスはあると思いますし、僕も考えてそういうことでやっていきたいと考えています。

**坂下** それでは次に大塚さんお願いします。

**大塚** 先ほど津島さんから加工を始めると加工の方がメインになる人が多くなっているという話がありました。確かに私の地元にもそういう方がいらっしゃいますが、全国的には大きな農業法人では結構、お子さんが複数いらっしゃって、兄弟で分業しながらやっているケースがあります。知り合いの山川牧場では男の子四人兄弟で、獣医とかお店とか加工とか

を分業でやっています。

経営的に見ると、一人の経営者でやっていくのはどうしても難しいから農業をやめないとなるのだと思いません。しかし、全国的には複数のお子さんが続いでやっているという事例が増えていると感じています。

つとも、息子が三人いまして、長男は農業高校を卒業した後、タキイ種苗の研究農場（滋賀県）で二年間、農業の基礎をしっかりと教えてくれる専門学校に入りました。そして、この春卒業して帰つてきました。次男は高校卒業した後、オーストリアにワーキングホリデーに行きました。その後、農業機械メーカーに就職して、機械のことを勉強しています。三男は高専の学生ですが、スマート農業を勉強する計画をしています。形態がしっかりしていれば、複数の兄弟に継がせるのが、実は一番うまくいくモデルケースではないかと考えています。今年の経営状況ですが、暑さで野菜も全国的に不

調な中、うちは結構良かつたです。なぜ良かったのかなど、タキイを卒業して就農した息子と、息子が連れてきた学校で同期だった子が、農業を基本的なことから勉強してきたので、彼らが、肥培管理を非常に頑張ってくれたことが収穫量の確保につながったと思っています。

あと、有機農業で「〇〇品田ぐらい野菜を作っていますが、周りを見渡すと、なんだんとれなくなつてきています。有機農業は国産の肥料を使用しており、現在農薬、化学肥料はすごく高騰していますが、為替の影響を全く受けていません。そのため、コストの上昇をおさえられました。

新しい取り組みとしては、先ほどから餌の話が出ていますが、WCSを作りました。隣町の江別市で有機の牛乳をやつて販売しました。WCSは穂が出る前に収穫するので、トマトが忙しくなる前に終わるのがメリットで、WCSも水があ

れば、もうちょっと生産を増やしてもいいかなという感じです。

燃料の高騰は非常に大きな問題だと思います。昨年、干し芋の加工場を新築しました。その時に、壁面を全部太陽光発電にしました。それを全部蓄電するようにして、農場内で使用する電力の五〇%を自給でやるようにしております。

**坂下** ありがとうございます。有機

のWCSというのは考えたこともなかつたのですが、餌を供給するのはなかなか難しいようで、量的な問題もあると思いますが。

**大塚** 生産組合を利用しています。耕畜連携というのは、この先すごく重要なと思っていて、江別市の法人の他にも、当別町に有機卵をやってくるところがありますが、そこには野菜の残渣を提供しています。夏は葉物野菜とかミニトマトとかズッキーニとかの規格外にもならな

い形の悪い物を一週間に二回、受け取りに来ていただいています。代わりにうちは卵を買うといつづづづづ交換みたいな感じです。冬はサツマイモの干し芋を作った時の皮とか、そういう残渣物を鳥の餌として引き取つてもらつて卵を買っています。新篠津村は水田地帯で、酪農とか畜産が全然ないので、近隣町村と連携して横の繋がりを持つてやつていくのがいいのではと思っています。

**坂下** 今は有機の連携を作つていかないと。輸入に頼つていては本当に大変ですね。

**道下** 今年みたいに暑い年には、防除等は例年と違ひはあったのですか？ 有機で病害虫の発生とか。

**大塚** 每年毎年違うのですが、今年は息子が帰つてきたので、普及員が応援に来ただいたり、取引先も土壤分析と

かをはじめにやつてくださいました。経営者が五〇代だと『ひづれ』といふも、息子が帰って来たから、応援の体で周りの方が協力してくださいり、うまくいっています。

**星野** 息子さんが自発的に農業をやるよう、今まで子育ての中で意識してきましたことはありますか？

**大塚** 近所の農家ですと、お母さんが忙しくて習い事とかにも行けないとかはあるけれども、そういうのは意識していないですね。

夏に海水浴とかキャンプとかには連れていけませんが、その分、冬にはしっかりと連れて行きました。そういう時に、「農業だからこそのできるのだよ」と教えたりしました。

**坂下** では次に内田さんお願ひします。

**内田** 岐阜県素晴らしい生産者の方で、私は単に農協職員で恐縮なのですが、美瑛では、アジア圏の観光客も増えており、マナーの悪さも田立つてきてしまいのです。

異常気象といふことで気象を調べてきましたが、上川、美瑛は寒暖差があるのが一つの特徴にもなっていますが、今年は特に夜温も高く、寒暖差がなかったという状況です。夏日以上が例年だと五〇日ぐらいですが、今年は一〇〇日以上もありました。特に盆明けには高温が続きました。雨も多く、ゲリラ豪雨も結構あり、馬鈴しづが流されるとか、そういう被害も結構ありました。

収量については、畑作四品については平年並みでした。野菜類については平年の九割ぐらいです。ただ、中身を見ますと、米ではタンパク値が高かったり、小麦は軒並み倒伏したり、ビートは糖度が低く、馬鈴しづだとライマン値が低い、つまり生産者にとっては身入りが少なかつた年だったという状況です。



内田 達也 氏：JAびえい

**坂下** 寒暖差はどれくらいになりますか？

**内田** グラフで見ると一〇度くらいですね。夏場、本当は一五度くらいあると思うのですけれど。

**中野** 北海道全部が寒暖差は結構あります、今年の北海道、特に盆地のところの寒暖差が少なかつたのです。

**坂下** 今年は本当に暑くきつい年だと思うのですが、また少し戻るのではないかという観測とか、今後どのように対応するのかというようなことは教えていきますか？

**内田** 多分生産者は「こんな異常な年はないだろう」と思っていまます。ただ、今後もないことはないと思つてるので、多分直近の課題ではないかと思います。何を作つたらいいのかといつて生産

者は悩んでいます。

**坂下** 今の温暖化というか、熱波の関連で何かありませんか？

**宇野** 天塩もずっと雨ばかりで、今年は二〇度を超した日も結構ありました。去年は無くて、一昨年くらいにはあったと思います。昔はこんなこと絶対なかった。ですから、だんだんその確率は高くなつてくる気がします。もう何か月も雨ですから、工場内の湿気対策でエアコンをフル稼働して、電気代もすごいですし、牧草も全然入りないから、もう収穫をあきらめたところもあります。今年は本当に酷かったです。久々に酷い年じゃないですか。

**坂下** 美瑛のトマトは、平取の次くらいの規模ですよね。

**内田** えつですね。単協では平取の次

です。函館が今一番手です。でも、トマト自体の相場がここ最近安い。品種も今はモモタロウを作っていますが、日持ちしないので、品種を変えるとかの対策を必死で考えているところです。

**坂下** それでは井澤さん、お願いします。

**井澤** 温暖化の話で言つと、今年はすこしく暑かったのですが、この三ヶ月、美瑛でも局所的に三五度近い日が何日もありました。例年多くとれるゾーンのところだけ何も実がついていないという感じです。三四度くらいになると受粉しなくなるので、僕は農薬を使わないのですが、それに影響を受けています。それが嫌で、今年はビニールハウス全部を天面をつけないで栽培しました。それをしなかつたらもつとれなかつたと思います。

美瑛はハスカップが良かつたようですが、最後の収穫で強風と雨に見舞われ、

結果的には豊作だったのに収量は普通ということになりました。玉ねぎもあまり大きくならなかつたけれど、例年ぐらいの量は収穫できたとは聞いています。大豆は今年壊滅的で、僕も春植えて三回撒き直しました。発芽する前に長雨に当たり、何回植え直しても芽が出てこないという状況です。大豆は不作ですが、収



井澤 勇太 氏: 美唄市

穫がまだ終わっておらず、雪が心配です。昨年末にクラウドファンディングで、大豆の選別機を買って、福祉施設（光生会）の就農支援施設に無償で貸与して、大豆の選別を請け負つてもらう事業を一月から始めました。今のところ、うちの物しかやつてなかつたのですが、ちらほら持ち込みがでてきました。七月末に美唄市内に「大豆の選別事業をやっています」という広告を配りました。

また、うちの大豆で突然変異によつて大粒になつた「ゆきほまれ」があるので、その品種登録を今年中に申請しようと思つています。その名前を、美唄市の小学校で募集し、道新の購読世帯四、一〇〇世帯くらいにチラシを配つて名前を公募しましたが、応募がありませんでした。それでグリーンツーリズム研究会という、主に修学旅行を受け入れているグループ、今私が代表をやつているのですが、そこで最終的に名前を決めてもらつて申請しようかなと思っています。

あと美唄には、プロ野球機構の承認を得ているプロ野球チームの「プラックダイヤmonds」がありますが、そこから事業委託で飲食店をやつてくれと依頼され、七月一日から週二回、金曜日と土曜日だけイタリア料理屋をやつております。一応、自分のこの野菜もそこで使ふますが、なるべく地場のものを使ってやりたいということで、近くの農家から野菜を買つたりしています。たまに「アスパラひつじ」とか、美唄でもなかなか市民の人が口に運べない食材を使つていて、それとは別にトマトジュースを自分の納屋に加工場を作つて製造しています。大豆も何か作りたいといつことで、「煎り大豆」と「黄な粉大豆」を、自分では作れないの'OEMで作つて、先週ぐらいいから一部で販売を始めております。

あとは、プラスチック樹脂の中に金属の粉体を入れたものを圃場の周囲に埋設して、地中のバクテリアを活性化させるという装置を作つていています。電池も電気

も何も使わないものですが、金型を作つてちよつと先月一回目の製造が終わりました。

使い始めて、美唄市内のちょっと大きめの農家がそれを使ってやりたいと言つてくれたので、今その圃場に埋め始めたところです。肥料や農薬を使わず、地中の土着菌を活性化させる方法です。土中の菌は一割程度しか働いてないらしく、どのように残りの八割を活性化させるかといふことで取り組んでいます。

自然栽培では何も使えないの、それは液体でも粉でもなく、ただプラスチックの樹脂であり、それを圃場の周囲に撒いて、より自然環境に近い状況を地中の中から捻出するという考え方です。それは共振作用と言って、人にはわからない微細な振動を起し、微生物が活性化やすい状況を作り出すということです。肥料をやると、日和見菌といって働いてない菌が肥料の真似をして働くので、その肥料が効果的にバクテリアを大量につく

りだし成果をあげるのですが、ある一定時間経つと、入れた肥料の勢力が弱まつていふことで、日和見菌も活動をやめていくのです。要はヨーグルトを食べてお通じが良くなつたけど、しばらく食べてお通じが良くなつたけど、しばらく食べてヨーグルトをやめると、またお通じが元に戻っちゃうみたいなことが地中の中で起こつているわけです。物理的に何か与えてどうにかするわけではなく、地中のバクテリアが活性化することによって、持続的にその状況を保つて、より良くしていふというものです。

**道下** バイオ炭とか、不耕起栽培とかと同じような、微生物を活かすというようなことですかね。

**井澤** そうですね。従来の自然栽培だと、圃場の土造りのために相当年月をかけて成果が出るという不安定さをはらんでいるので、そことなるべく短期間でできるようにという考え方です。そういうの

を使うと、より短期間でやりやすいといふことです。父の知り合いが十勝清水（宮路牧場）で同じように土壤に使って、放牧、自然飼農をしています。結構、牛の体調面も変わつてくるようで、動物が食べる物もなるべく良いものをとなんど、なるべく肥料を使わないでやるよつなどになりますが、乳量は慣行の四分の一程度のようです。自分たちでそれを使いながら、じつじつとができるといついとを広められたら良いなと思つています。

**大塚** 農福連携について、選別してもらつた大豆を、農協とかで袋詰めしているのでしょうか。

**井澤** いいえ、うちはずいぶん小さな農家なので、農協に大豆の選別をしてもらつとなると、ロットが六〇〇キロと言われ、それを持っていく手段もない。去年は一トン強ぐらいしか取れなかつたし、あきらめました。選別できる品種がすゞ

く限られており、大豆のサイズも「黒千石」や「たまごくり」もできないというところでした。

自分では大豆の加工品をいっぱい作りたいと思ったのですが、規模を増やしても、農協の現状ではやってもらえないのでは、選別機を見つけて、近いところの施設にお願いしてやってもらい、費用を支払っているわけです。

地域貢献にもなるし、雇用の確保にもなりますが、規模が小さい農家では雇つたりするのが難しいので、キロ単価で支払いする方法で農福連携に取り組みました。大豆の選別機を作ってくれている会社の社長もアピールしたいといつこと、地域のモデルとしての最初の一歩田になりました。その機械で選別してもらつた後に、手選別でもう一回やってもらつてもらつてもういます。その後はパック詰めもやってもらえるので、色々できるかなと思います。もし何か変わった品種とか、やって欲しいものがあれば、美唄以

外の方でも声をかけて下さい。

**大塚** なんか突然変異で出来たストーリーですね。ありがとうございました。

**井澤** 「ゆきほまれ」をもらつて土を良くするためにたくさん植えた時、すごく大きい鞘で背丈も大きい大豆が出てきたので、それを毎年種取りをして品種登録して美唄の特産の一つにしたいと思っています。加工品にした時に、美唄産の「美唄〇〇大豆」のような名前で売れれば、加工業者さんにもメリットがあり、美唄のPRにもなると思います。

**道下** では津島さんお願いします。

小豆は高温のために成育が続いて花落

ちしたりして、最後の方には温度が下がつてから二次成長というのが多く、軸さやと青いさやの混在のまま秋の収穫期を迎えた。収穫現場では収穫適期がいつなのか判断が難しいまま、青さやがあるままの収穫をやりまして、「並」から「良」、人によつては悪いという非常にム

次の収穫となる金時も天候にも恵まれ、収量的にも「良」で終わりました。次にニンジンの収穫の時期、七月下旬に始まるのですが、うちでは被覆をするパオパオのスタイルでやっています。今年は雨量の関係で、うちでは発芽不良となり、二ンジンは「不良」。

十勝では、小麦の後にはだいたい綠肥を蒔きます。ひまわりや早生種のエン麦が多いのですが、今年は初めて、早生種のエン麦にイモチ病がつい、ほとんど

**津島** 今年は、春からの雪どけが順調で作業が早く、秋小麥の育成時期が平年から一週間早まったステージで、七月の下旬から高温期に達して仕上がつたので、まず小麦の豊作から始まりました。

ラがある状況でした。

大豆は豊作。かなりの方が、記録的収量をあげました。ただ、秋が非常に温かいということは、湿度が高くて、なかなか風が吹いてくれないので、汚粒氣味や汚粒の方もいて、なかなか豆が乾かない。収穫に時間がかかり、現在でも九九%くらいは収穫が終わっていますが、一部ではまだという状況です。

てん菜、馬鈴しょも、春からの天候が良くて成育が良く、ずっとプラス。一〇〇に対して、一〇五～一〇六くらいの生育で、馬鈴しょは豊作です。てん菜は、病気が多発しています。過去にも一度こういうことがあったので、基準日よりも早めに徹底防除して、うちのビートも抑え込みました。食用馬鈴しょ並みというか、非常に繊細に野菜の防除をしているような気持ちでしっかりと防除しました。てん菜の収量は多いのですが、高温だったために、糖分が低いという状況です。以前は、冷害が非常に問題になつた

のですが、近年、高温になることによつて、多少雨が降つてもすぐ乾いてしまつ。冷害の時に安定的だった地域は、砂質であつたりして水はけが良いのですが、汚粒になつたという例が数件あります。近年、非常に収量が落ち込んでいます。干ばつになつていて、そのあとに人参を播種が焼けるのがずっと続いていて、その地域は灌漑が必要ではないのかという話もあります。そういう灌漑をやつている地域は、コストがかかってそのあたりが非常に難しい。影響を受けていないところは、作土層が多く非常に水はけも良いわけですが、土作りもしっかりやつている。作土の深いところは安定しているのです。どんな土地で何を栽培しているかで、所得差が出ています。焼けているところの人たちは、「これ以上続くと、完全に作物を変える」というよりも、農家やめようかという話まで出ている人たちが出ています。

現場では、ちょっと作付けを控えてくれと言われているてん菜や、肥料をなかなか減らせない人たちは、肥料高騰の打撃を受けています。いかに削減するかという話が飛び交う中で、実は肥料を減らしました。地域の特色でいいますと、耕畜連携で秋にライ麦を撒いて、六月上旬までに収穫して、そのあとに人参を播種することを、農協などで推進しております。野菜も、加工用ブロッコリーを機械収穫で進めたいということで、機械メーカーとともに研究をしています。これまでの野菜等は人手がかかり、人の確保は難しい。したがって機械化のできる野菜にシフトしていくしかない。プラスアルファで加工野菜をとりいれて安定した経営をつくることが力説されています。

小麦、大豆、馬鈴しょ、てん菜あたりをしっかりと作っている人たちが、実は安定して所得を伸ばしています。そのあたりは、「しないよつて良い経営をやつ

していくのが大切だと思っています。

あとは、やきほど話の合った民泊体験とかを、コロナ前から一一年ほどやっていて、コロナの間は休止していましたが、日帰り体験っていうのを昨年から受けています。十勝でもコロナ前は五〇〇円ほどが登録して民泊を受入れる話でしたが、今はもう一〇分の一ぐらいです。世代交代もしましたし、徐々に年齢も上がったといつもいって、今後の都会との交流は少しあと難しくなってきた。地域もコロナ禍につくついても、メールで済むとかで、対面で話をするとこうしたことが徐々に億劫になってきています。

しかし、地域コミュニティ、人間らしさってなんだらうかとこうじとを、しっかりと見つめ直していかなければならぬと思います。あと、自然減などで農家の減少は止まらないので、確実に規模拡大が進んでいくだろうと思われます。現場で求められるのは効率化であって、効率化を求めていくと、小さい畑とか形

の悪い畑は、やはり耕作放棄地になる可能性があります。「これを容認していいのかを考えなければならない。耕作放棄地が出てくるといつことは、全体的な自給率の低下、食としての生産量が減ると思っていますので、適地適作、適地による適正な規模、家族経営が主体であることは変わらないと思います。

やはり、その家族経営が成り立つ、こつある「きモト」的なものも、多種多様にあると思いますので、その辺をいろんな手法とか、いろいろなケースをどんどん広げていって欲しいと思っています。

**坂下** ありがとうございます。昔更是、ものすごく地価が高いのですよね。地価が高いということは競争的といつことだと思うのですが、それでもやはり農家減少は止まらないので、確実に規模拡少と規模拡大は進み、小さな農地は使われないかもしれないというのは、なんとなく私のイメージとは違つてきました。

**津島** 今、平均が約四〇ヘクタールくらいですが、地帯によつては六〇ヘクタールなど、いろいろなところがあります。農地を増やして所得を上げている人と増やしたことによって所得を下げた人と見ていると実は内容的には差が出てきます。効率を上げなければなりません。それは、やはり間違ひなくなります。それで、おそれなくトラクターも大型化する、機械も多くなつていくと、小さい畑は非効率ですよね。極端に言ひつと、うちもやつのですけれども、五反、六反、七反と、そういう畑があるのですよ。それで三角形だと、これは必ずしも効率が悪い。カーバーを今はできているのですが、その畑で多くの時間を費やしてまで作るべきなのかといつのがあります。仮に、そんな農地が二〇〇ヘクタールや三〇〇ヘクタールになったときに、「ここで作りますか?」といつ話なのです。

**坂下** 津島さん、大きいであります。

**津島** いま一二〇ヘクタールに少し足りないくらいです。今は隅々まで作っているのですが、今後、これがどうなるかがわかりません。

他所を見ていると、「そういう小さいところは要らない」と言つのです。良いところが出るのを待つて、そこが出た時には入札ではないが、そこは高く買うからです。

仮にそういう小さな畑が出たら、みんなで要らないということです。最終的に三万円か五万円だったり、「じゃあ考え方」いうような人もいるかもしれないのですが、音更の話で言つと、もつと離れた端の方に行くと、五万円ぐらいでもいるといふ人が出たりします。

そのあたり、自給率の維持や総生産量確保のために北海道としてどれくらい必要で、そこでは平均単収で生産するとして、ここにこの畑の面積が必要で、その畑の面積を作るのには何戸の農家が必要だと。そうしないと地域崩壊す

るとか、地域の生産量を維持できないとかになります。

もっと大型化できる農地であれば問題ないかもしだれないが、そこには小さい区画でもやれるという農家があつて、その農家に何らかの課題があるのであれば、その課題を克服するために国などの支援が必要なのではないかと思います。

**坂下** やはり、今日いろいろな話を聞くと、本当に多様な農家の形が出てきて、地域としての考え方もあると感じました。十勝の中でも、音更是中心的な良いところだと思うのですが、そこでも四〇ヘクタールくらいでは厳しいのですかね?

「これは、そこの人人が農地を引き受けけるのか、遠くの人にお願いするのか等の調整が必要で、そんな想定は、どこの地域でも起きている話だと思います。やはり見える範囲、隣近所だったりすると、多くうだなど、「これは大変だ。十年後、五年後くらいからでは・・・」と思つて

り全てが多いといふのが楽な人達です。

ただ気候の影響とかが大きいと感じています。行政では、後継者の地域実態と十年後の経営等について、後継者がいるところを、七〇歳以上で後継者のいないところなどを、赤、黄、青の色分けで、町内の農家の全農地に色塗りしているのですよ。それを見たときに、真っ赤な地域

があるのですよ。七〇歳以上が平均でそこにポツポツと青色が入っているという地域が。そうすると、この地域は、十年後とか十年後の予測では、農家がいなくなつて、「じゃあこの地域は一軒しか残らない」ということ?」と思つてしまひます。

「これは、そこの人人が農地を引き受けけるのか、遠くの人にお願いするのか等の調整が必要で、そんな想定は、どこの地域でも起きている話だと思います。やはり見える範囲、隣近所だったりすると、多くうだなど、「これは大変だ。十年後、五年後くらいからでは・・・」と思つて

いもす。

**道下** 赤く塗っているところには、後継者は全くいないのでしょうか？

**津島** いません。アンケート調査で、入る見込みもないところでは、もつもつじつ答えを出しています。

**坂下** では、地域農研などが、「そのような地域をどうするのか」との研究を進めるのも役割なのかなと思います。

**津島** 役割は大きいと思いますよ。いろいろな地域で、役場でも気づいてはいるけれども、どうしたら良いのかというのがわからないので。担当者はその実態を把握しているけれども、場合によっては恐ろしくて報告できないのです。誰かがそれを見て、「それについて、今後どうあるべきか」「今後どうしましよう」という議論もなく、「新規就農がなんど

かで、じゃあそれで良いのではないでしょうか」くらいかな。

**大塚** これから先の農業人口は減る一方のはわかるのですが、少数の大規模農家が人を雇用して日本の食料を支えていくことになっていくのだろうと思います。それから、「そんな小さいところ、やらなきやだめだ」という話はあります

が、「効率が悪いのであれば、やらないでも良いのではないか」と、私なんかは思ったりもします。今、全国的には、農業者で売り上げが一、〇〇〇万円以上ある割合は、一二%しかないわけです。八七%は一、〇〇〇万円以下で、しかもその一、〇〇〇万円以下の大半は五〇万円以下だということになっています。それは、もはや農家ではなくて、農的暮らしの人たちです。今後のことを考えたときに、農的暮らしの人なのか、ちゃんとした農業者で食料を支えている人なのかと

〇年後も後継者がいるといふとか、経営者が独立したりだとか、そういうところにお金を落としていかないと、これから先、日本の食料は足りなくなるのではないかと思います。

**坂下** 地域農研としても、いろいろ頭を悩ます、一緒に悩まさなければと思いません。どうもありがとうございました。

**道下** 長時間にわたり有益な話、ありがとうございました。人間もへたりましたけれども、植物だとか、動物も含めて今年の夏は大変な思いをした中で、これがたまたま今年だけだったのか、何年かおきに来るのかについては、後者じゃないことを期待したいなとは思っていますが、そういうことも予想しながら次のステージに行かなければならないのかなという時代になつてていると思います。

皆さんのお話しを聞いていますと、労働力、人手の確保をどうしていつたり良



いのかと、こういった、いろいろなアプローチで農業を持続的に進めていく上で、どういうことがやれるのか、やっていくかというような取り組みをされているのかなという感じがしています。

今日午前中理事会がありまして、今後三か年を見据えた中で、SDGsだと、みどり戦略、言葉で言えば簡単なのですが、非常に一つ一つの取り組みが難しくて重い内容でありまして、それらを具体的にどうやって取り組んでいくかというようなことに視点を当てて、地域農研としても研究の幅を広げたいと思っていました。先ほど所長からもお話をありましたように、今までの問題の捉え方や深みが違うような大きな課題も散見されていますので、また違った目線で、モニターの皆様に、「協力、ご助言をいただきながら取り組んでいきたい」と思っています。今後とも「指導のほどをよろしくお願ひします。ありがとうございました。

**石田** 以上を持ちましてモニターミーティングを終了させていただきます。

